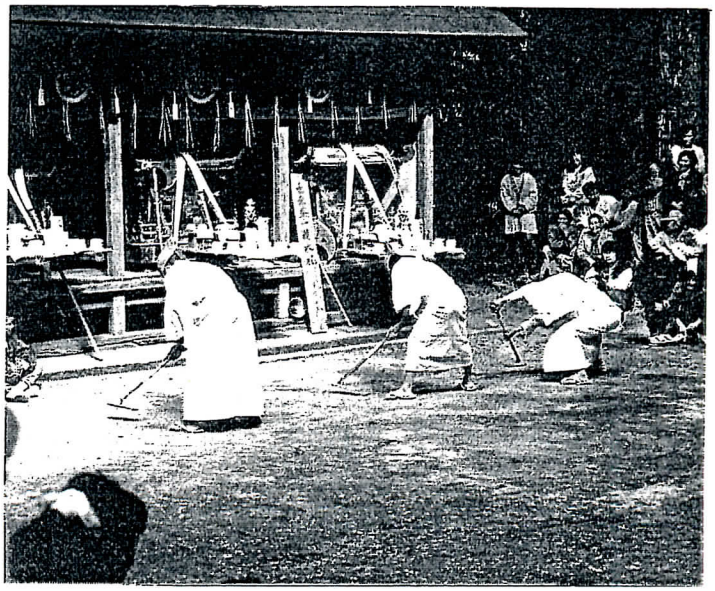
無形民俗文化財

桧原マツ

一、耶馬渓町大字中畑
二、桧原マツ保存会
三、県指無民　昭和五八年四月一二日
四、鎌倉時代
七、

「桧原マツ」は、津民地区桧原山正平寺で行われる神仏習合の御田植祭である。この寺は、桧原山（七三五メートル）の中腹にあり、彦山六峰の一つとして開かれた寺で、天平勝宝四年（七五二）国司中納言行房郷の上奏により、勅願所と定められ以来山を桧原山、寺を正平寺と称した。平安時代から鎌倉時代、室町時代にかけて繁栄した山で、盛時三十六の坊中（寺）を有し、中津藩の祈願所として、群民の崇敬厚い寺であったが、明治維新の変革や明治年間再三の火災により一寺を残すのみとなった。しかし七百年以上の伝統をもつ桧原マツは、藩制時代寺領であったと言われる山麓の上川内、中畑、福土の三集落の信者によって継承されてきた。現在は、四月第二日曜に行われているが、行事に先立って、中津の浜の潮水を汲んで、山頂の権現様に供えることから始まる。当日は法要の後、昔の山伏になぞらえて僧兵、僧侶、みこし三体の行列が練り歩くお上りがあり、引続いて御田植式が行われている。御田植式（まつやくと言う）は、水とめ、田うち、畦ぬり、くろぎり、しろかき、種蒔き等稲作つくり一連の所作が、古式豊かに観客とのやりとりの中で、ユーモアを混じえてくりひろげられる。中でも田うち、種蒔きでは独特な節廻しの神歌が奏上される。御田植式は英彦山六峰の修験の山々（英彦山＝添田町、求菩提山＝豊前市、松尾山＝大平村）でも行われており、それぞれの特徴を伝えているが、当山の素朴な行事は御田植式の最も古い形を、そのまま受けついでいるものと研究家は高く評価している。したがって衣装や道具だてに、派手さは全くみられない白装束、あみ笠のいで立ちであるが、これは山の神々が農耕を司ると言うことを表現する一つの意味もあるのではなかろうか。こうして山における五穀豊穣を祈る行事が終わると、山の神は里に下りて農耕を司り、春深まるに従って、近郷の農耕作業が始まるのである。「マツ」とは、まつりのつづまったものであり、今は行われていないが、「マツ柱幣切行事」と言う重要な儀式があった。これにより「マツ」と言う説もある。